

渡部昇一著「国民の教育―古典とは何か―」扶桑社 2001年11月10日刊を読む

1. 最後まで残ったのは、『半七捕物帳』であった

- (1) ①小学校の6年生のころから私の江戸時代への憧れはやみがたいものになっていた。
 - ②それはもちろん少年講談によって養われたもので、別に本格的に江戸文化を知っていたわけではない。
 - ③その幼稚な江戸趣味と、物語の面白さの両方を味わわせてくれる意味で、捕物帳はすばらしい読み物であった。
- (2) ①英語の時間に『人形佐七捕物帳』を読んでいるところをつかまってひどく叱られたこともあった。
 - ②当時はなぜあんなに捕物帳が面白かったのか不思議なくらいであるが、きっとだんだん戦争が緊迫してくるなかで、江戸時代の物語の世界に入り込むことは、甘美な逃避だったのかもしれない。
- (3) ①学徒動員の休みで帰ってきて、物資不足のところを母が無理してつくってくれたポタ餅を食べながら、ふとんにもぐりこみ、腹ばいになって『ぜにがたへいじ銭形平次』などを読んだ楽しさは忘れることができない。
 - ② B29 がやってこようと、グラマンが飛んでこようと動くもんか、といったような気持ちであった。
- (4) ①このようなことは、戦後もしばらく続いた。捕物帳とあらば、なんでも読んだ。
 - ②しかも少年時代以来、筋がわかっていても読み返すことはいっこうに苦にならない。
 - ③昭和 25 年以前に出ている捕物帳なら、読んでないものはないと言ってもよいと思う。
 - ④しかも何度も何度も読んでいるのである。
- (5) ①そのうちどういことが起こったであろうか。
 - ②大学に進学し、難しい本も読むようになったせいか、あんまり幼稚っぽい捕物帳は繰り返して読むに堪えなくなったのである。
 - ③最後まで残ったのは『銭形平次』と『半七捕物帳』である。
 - ④そして大学院に進むようになると銭形平次が脱落し、最後に残ったのは『半七捕物帳』だけである。
 - ⑤これだけはその後も何度繰り返して読んだかわからない。そしていまだに少しも飽きない。
- (6) ①そしてふと気づいてみると、それは私だけの判断だけでなく、読書人一般の判断であるらしく、岡本綺堂おかもときどうの『半七捕物帳』だけは、数ある捕物帳の中でもまったく格別になっているらしいのである。
 - ②そして文学としても資料としても尊重されているように思われる。
- (7) ①そんなことは当たり前で、読めばすぐわかるではないか、と言う人もいるであろうが、これは私にとってはとても重要な体験なのである。
 - ②私は、最初のうちはすべての捕物帳をみんな面白いと思っていたのである。それが何回と

なく繰り返して十数年たったら半七だけが残っていたので、これはもう私にとっては絶対と言ってよい読書体験であった。

③結果的には、世の中の判断に合致しただけの話なのであるが、私の内面的な進歩の証拠みたいな気がして嬉しくて仕方がないのである。

2. 古典とは何か

(1)①世の中に古典と呼ばれる本がある。

②これは何度も何度も読み返され、時代を経ているうちに残った本のことである。

<コメント>

自分にとっての古典とは何か、更には、自分にとっての古典にどのように読み親しんだらよいか。さすが渡部先生と、舌を巻くほどわかりやすい説明。とてもためになり、豊かな人生を送る上で役に立つと確信します。是非、御参考にしてください。

2021年11月25日 林明夫記